

# 中学生を対象とした体ほぐしの運動の授業実践研究

－仲間との交流に着目して－

藤島 廉 ( 広島大学 )

## 1. 目的

本研究の目的は、中学生を対象としたチャレンジ運動が関わり合い活動として有効であるかを検証することであった。また、仲間との交流に着目した体ほぐしの運動の単元が体育における学習動機に与える影響を検証することであった。

## 2. 研究方法

1) 対象者：B 中学校第 1 学年の 1 クラス  
男子 20 名・女子 20 名

2) 調査方法

①各授業後に、集団的・協力的活動に関する評価票（小松崎ら，2001）を用いて、関わり合い活動に関する生徒の評価について 3 件法で調査した。

②単元前後に、学習動機調査票（糸岡ら，2005）を用いて、体育授業において学習を動機づける要因について 4 件法で調査した。

3) 分析方法

①各因子における平均値と標準偏差を算出した。平均得点の比較については、一元配置分散分析を用いて行った。（ $p<0.5$ ）。

②単元前後の得点（4 件法）に対応のある t 検定を行い、統計学的な有意差を検出する基準は、5%に設定して分析を行った。

## 3. 結果と考察

1) 表 1 は、各授業における集団的・協力的活動に関する得点を比較したものである。得点の比較から、チャレンジ運動が仲間との関わり合いに対しての有効性を示したと考えられる。一方で、その他の因子の平均得点の間に有意差は認められなかった。これは、学級における状況に起因すると考えられる。本研究の対象となった B 中学校においては、通常の体育授業においても男女を混合にした活動を行うことが多く、先行研究の状況とは異なっていた。そのため、集団的人間関係や集団的活動への意欲におい

て向上はあったものの、有意差が認められなかった可能性が示唆された。

表 1 各授業における総合・5 因子の平均値と標準偏差

	1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	
総合	2. 71±0. 53	2. 68±0. 57	2. 66±0. 58	2. 83±0. 46	①<④* ②<④*** ③<④***
集団的達成	2. 89±0. 45	2. 79±0. 50	2. 78±0. 53	2. 89±0. 38	n. s.
集団的思考	2. 58±0. 57	2. 71±0. 53	2. 58±0. 59	2. 83±0. 47	①<④* ③<④*
集団的相互作用	2. 64±0. 55	2. 5±0. 68	2. 47±0. 70	2. 82±0. 45	②<④** ③<④**
集団的人間関係	2. 70±0. 51	2. 62±0. 58	2. 62±0. 56	2. 78±0. 55	n. s.
集団的意欲	2. 72±0. 60	2. 82±0. 48	2. 80±0. 46	2. 84±0. 43	n. s.

n. s. : not significant \* $p<0. 05$  \*\* $p<0. 01$  \*\*\* $p<0. 001$

2) 表 2 は、対象者の体育授業に対する学習の動機づけとなっている要因の変容を単元前後で比較したものである。これにより、本研究において仲間との交流に着目した授業の前後で学習動機に変容が生じたといえる。しかし、承認志向及び優越志向の因子で得点の減少が見られた。これは、他者との競争といった要素が少なかったことが要因として考えられる（糸岡ら，2005）。

表 2 単元前後における学習を動機づける要因の平均値、標準偏差及び有意差

	①単元前	②単元後	有意差
総合	3. 06±0. 89	3. 10±1. 13	n. s.
実用志向	3. 09±0. 61	3. 12±0. 85	n. s.
集団志向	3. 63±0. 36	3. 74±0. 37	*
充実志向	3. 35±0. 64	3. 6±0. 52	**
承認志向	2. 35±0. 99	2. 2±1. 02	n. s.
優越志向	2. 89±0. 96	2. 78±1. 34	n. s.

n. s. : not significant \* $p<0. 05$  \*\* $p<0. 01$

## 4. 結論

本研究では、中学生を対象としたチャレンジ運動が、仲間との関わり合い活動への有効性を示すことができたといえる。また、仲間との交流に着目した体ほぐしの運動における単元が、生徒の体育授業への学習動機に影響を与えたことが明らかになった。

## 5. 主な参考文献

1) 佐伯美千代・藤田雅文（2018）小学校中学年体育における「体ほぐし運動」の授業研究：チャレンジ運動による仲間づくりの効果の検証。スポーツ教育学研究，38（1）：71-82。